中丹プロジェクト２１会議
「みんなの笑顔プロジェクト」

みんなの笑顔

～特別支援教育の視点を生かして学級経営をサポートします～

毎日笑顔で教室に行っていますか？
子どもたちのことばにならないメッセージを受け止めることができていますか？
今悩んでいることには、ちょっとした取組や工夫で、解決できることも多くあるはずです。
そんな取組や工夫のヒントにしていただければと作成しました。これまで先輩から後輩へと受け継がれてきた学級経営のノウハウに加え、特別支援教育の視点から、その有効性を説明しています。

京都府中丹教育局

落ち着いて過ごせる教室づくり

教室の整理整頓

～心を安定させる～

ポイント1

掃除ロッカーの表示

教室が美しいということは、気持ちを落ち着かせ、課題に向かおうとする意欲を高めます。教室環境を整えることは、心を安定させる第一歩です。

●物の定位置を決めて整理整頓●

物の置き場所を誰にでも分かるように具体的に示すと整理整頓された状態を子どもたちで維持することができます。

●清掃の行き届いた教室環境●

すみずみまで掃除したり、床に落ちているゴミを見逃さず周りの子に一声かけて拾ったりするなど、子どもも先生も美化意識を共有しましょう。

●美しい黒板●

黒板の端に学習とは別の掲示や板書があれば子どもは集中しにくくなります。学習に集中しやすい黒板にしましょう。また、チョークなどが落書きにつながらないよう、置き場所等に配慮することも大切です。

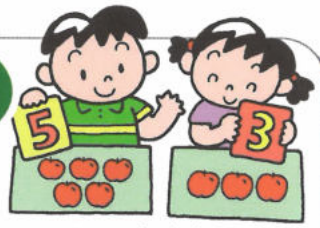
特別支援教育の視点より

子どもにとって、整然と整理された美しい環境は、イライラすることが少なく、落ち着きやすくなります。物の置き場所を決めることにより、保管場所が覚えやすくなり、元の場所に戻しやすくなります。美しい環境を整えると、気が散りにくく、授業にも集中しやすくなります。

座席への配慮

～学習意欲を高める～

ポイント2



「集中できないのはどんなときか」「その子どもの頑張りを見ることができるのはどんなときか」を観察し、座席の配置と関係について考えてみましょう。座席を配慮することで解決できることも多いはずです。

●目的を持った座席の配置●

見ることに配慮の必要な子、音に敏感に反応する子、黒板に近い方が集中できる子、人の動きを見て行動できるよう後方の席が有効な子、モデルになる子が近くに必要な子、教師の支援が必要な子・・・。それぞれの子どもの特性を見て、意図的に座席の配置をしましょう。多動な子や高い場所が好きな子は窓際を避けるという配慮も大切です。

●学習に集中しやすい座席●

基本的に、前面黒板を正面に見る座り方が学習に向かいやすいですが、話合い活動等、全員の顔が見やすい座席が効果的なこともあります。場面によって座席の配置の工夫が必要です。また、個々の子どもの机や椅子を体に合った高さにしておくことも大切です。

特別支援教育の視点より

子どもにとって、座席の配置は、授業への参加に大きな影響を与えます。周りにモデルとなる子がいると、その子の動作を見て次に何をすればよいかが分かるようになります。また、支援してくれる子が近くにいると、安心して学習に取り組めます。

掲示物の配慮

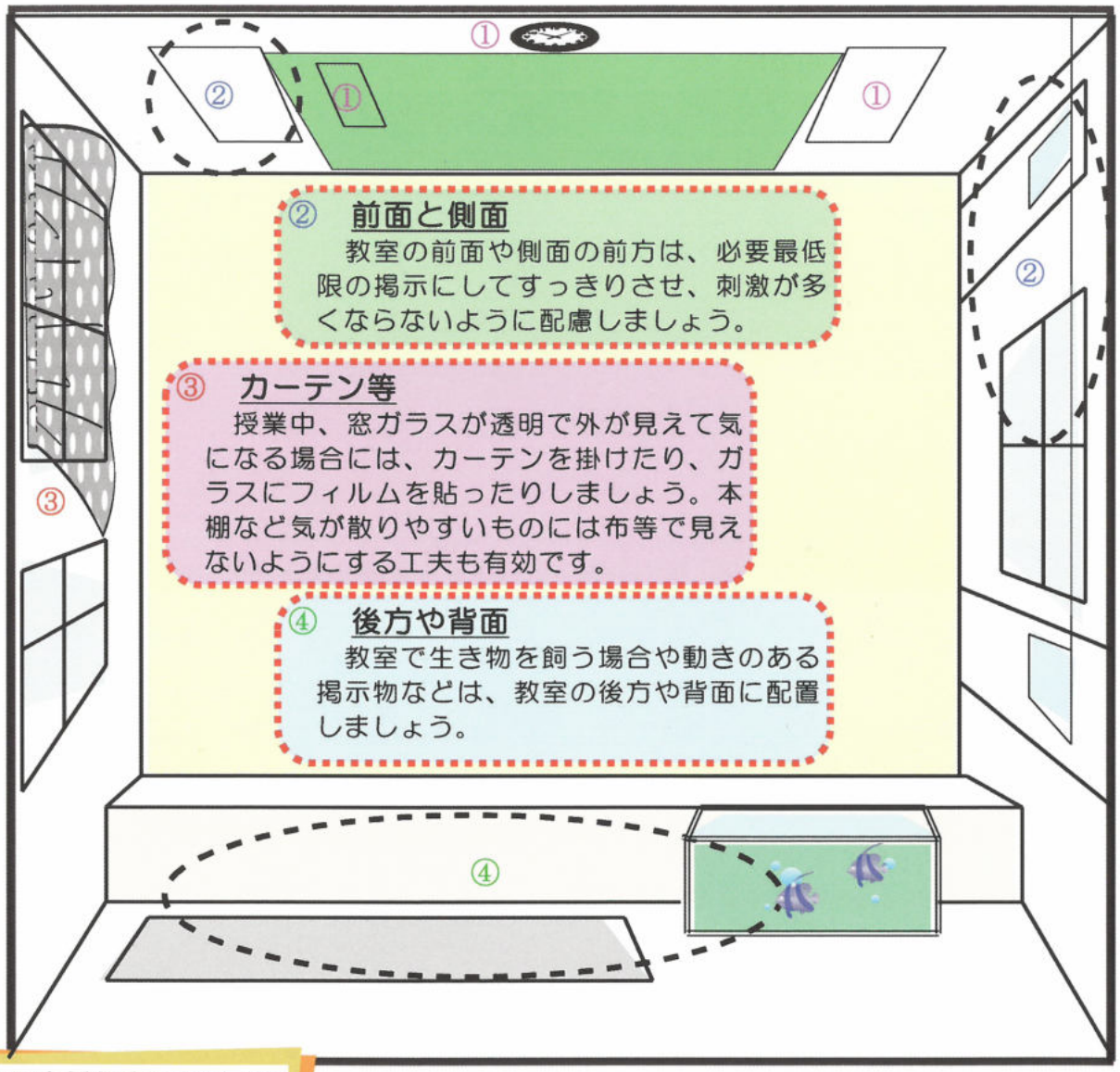
～学習に集中させる～

ポイント3

教室の中に、子どもの作品や取組のめあて、経過等が掲示してあることは、教室に活気を与えます。しかし、カラフルな掲示や動くものに興味を持ち、大切なことに集中できなくなる子どももいます。掲示物の配置を工夫することによって、どの子にとっても、やる気がわき、落ち着いて学習できる環境となります。

① 見通しの持てる掲示物

教室の前面などの見やすいところに時計を設置し、1日の予定、1時間の授業の流れなど、見通しの持てる掲示物や板書を心がけましょう。



② 前面と側面

教室の前面や側面の前方は、必要最低限の掲示にしてすっきりさせ、刺激が多くならないように配慮しましょう。

③ カーテン等

授業中、窓ガラスが透明で外が見えて気になる場合には、カーテンを掛けたり、ガラスにフィルムを貼ったりしましょう。本棚など気が散りやすいものには布等で見えないようにする工夫も有効です。

④ 後方や背面

教室で生き物を飼う場合や動きのある掲示物などは、教室の後方や背面に配置しましょう。

特別支援教育の視点より

子どもにとって、様々な色が使われているマグネットや掲示物、水槽やカーテンなど動きのあるものは、大きな刺激となります。そのため、授業よりもそちらに注意が向いてしまう場合があります。授業中に刺激となるものは、目に入りにくい位置に置くようにすると、先生の動きや黒板の方に注意を集中させやすくなります。

見通しが持てる約束づくり

時間を守る
～規律ある生活をつくる～

ポイント1

「時間を守る」ことは集団生活の基本です。業間や昼休み、清掃などの終了時刻を守り、授業開始のチャイムとともに学習が始められる学級にしましょう。

●時間の見通しを持たせる●

・１日の見通し　…　１日の予定を掲示し、朝の会で全員に確認させましょう。通常と異なる時程は、見やすい場所に分かりやすく示すことが必要です。

・学習の見通し　…　１時間の授業の最初に学習の進め方を理解させましょう。活動させる場合は、どのくらいの時間で行うのかを明らかにすることが大切です。

●教師自身が時間を守る●

授業開始のチャイムとともに授業を始め、授業終了のチャイムとともに授業を終えます。授業の挨拶など、学習と学習の区切りを明確にする工夫をしましょう。

●急な変更はできるだけ避ける●

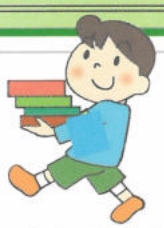
どうしても急に変更しなければならない場合は、全員に周知徹底するようにしましょう。

＜小中連携のために…＞

教科担任制の中学校での学校生活に適応させるためにも、小学校段階から時間を意識して学習や活動を切り替える習慣を身に付けさせることはとても重要です。

提出物を確実に出す
～自己管理能力を高める～

ポイント2



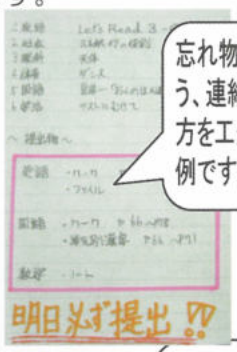
毎日、宿題のプリントやノート、提出書類などたくさんの提出物があります。それらを子ども自身が忘れず提出できることが自己管理能力を高め、自信にもつながります。

●提出方法の明確化●

提出物は、「何を」「いつ」「誰が」「どこに」「どのように」提出すればよいのかを明確にしておくことが必要です。教師の机の上に提出物が雑然と散乱するのを防ぎましょう。

●予定や連絡等の記入●

提出物を確実に出させるためには、まず、翌日の予定や持ち物、提出物を連絡帳等にきちんと書かせる指導を継続して行いましょう。提出物の意味やその重要性について理解させたり、もれなく書けているかどうか、連絡帳を見て印を付けたりすることも必要です。また、忘れ物がないように書き方の工夫などを個に応じて支援することも大切です。



忘れ物をしないよう、連絡帳の書き方を工夫している例です。

●提出方法の例●

「このプリントはここに入れる」というかごを決めておくなど、提出物を入れる箱や袋をあらかじめ用意しておくと、各自で整然と提出することができます。何を入れる入れ物なのか大きな文字で書いておけば、さらに分かりやすいでしょう。

提出物を入れるかご等を置いておきます。

役割を果たす

～責任を持たせる～

ポイント3

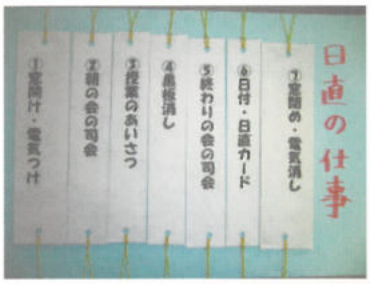
責任を持って自分の役割を果たし、周囲に認められることを通して、自己肯定感や自己存在感が育ちます。一人一人に役割を持たせ、最後までやりきる経験を積み重ね、責任感を育てましょう。

●役割の明確化●

一人一人に役割を持たせやりきらせるためには、「この仕事は誰がやるのか」「どんな仕事内容なのか」を明確にし、表等にして掲示することが大切です。仕事内容を一つ一つ確認して裏返していく『日直の仕事確認カード』などは、責任を持って役割をやりきらせるための有効な方法です。

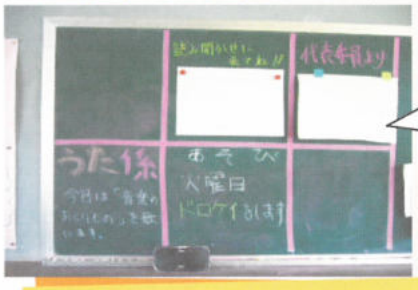
●自主的な活動を支援する手立て●

子ども任せにしすぎると、活動がうまくいかなくなることがあります。係や当番活動が充実するよう話合いの時間を十分に確保しましょう。また、計画を立てたり、活動の途中で振り返りをしたりして、よりよい学級を目指した活動を工夫させたいものです。『係からの連絡コーナー』などを設置し、活動について自由に広報させることも、自主的な活動を促すために有効な方法です。



仕事を終えて、めくっていくと・・・

全部終わると、「ごくろうさまでした」の文字が現れます。



背面黒板を紙テープなどで区切って『係からのお知らせコーナー』にしています。

背面掲示板を活用した係のポスター。振り返りメモを重ねて貼っていきます。

特別支援教育の視点より

学校生活を安心して過ごすためには、まず、時間や場所の使い方が分かり、見通しが持てるということが大切です。「いつ」「誰が」「どこで」「何を」「どうするべきか」を明確に示せば、一つ一つ指示がなくても主体的に行動でき、子どもにとって学校生活が非常に楽になります。

ポイント1

生活の見通しが持ちにくかったり、予定変更があったりすると、とても不安になる子どもがいます。１日の見通しが持てるようにしておけば、誰もが安心して過ごすことができます。また、授業の始めと終わりの挨拶は、時間の区切りを意識させるのにとても有効です。

ポイント2

子どもが提出物を確実に出すためには、提出物、提出の方法が明確になる必要があります。そのためには、提出方法や提出場所について、しっかり理解させる指導が大切です。どうするべきかが明確に理解できていると、子どもは主体的に行動しやすくなります。

ポイント3

学級で子どもたち一人一人が充実した生活を送るためには、自分の役割を知り、責任を果たすことがとても大切です。仕事の内容と役割が分かっていれば、取り組める子どもがほとんどです。

認め合える関係づくり

友達同士のかかわり合い

～一人一人のよさや特性を見付ける～

ポイント1

現代社会においては、大人社会に限らず、子どもたちの人間関係にも希薄さが感じられます。「友達」という関係も限られた範囲であったり、決まったグループの中でしか活動できなかったりしがちです。一見平穏な人間関係が築かれているようでも、その中から少しでも外れたとたんに不安を感じたり、違うグループとかかわることができなかったりすることがあります。そこで、教師が意図的にグループや集団を設定することにより、互いに成果を喜び合い、達成感を分かち合う経験を重ねさせたり、時にはあえて葛藤を生じさせ、それらの活動の中で一人一人のよさや特性を見付け、認め合えたりするように促すことが大切です。

●かかわり合う場を作る●

誰とでも、どんなときでも協調して協力し合える力を育てるには、日常的な当番活動や係活動などの協同の活動の充実を図ったり、多様な集団に所属したりすることが大切です。目的を持って生活グループを作り、男女の別なくかかわり合ったり、グループの中で声をかけ合ったりすることができるようにします。その取組の過程で、何か矛盾が起こったり、もめ事が起こったりしたときこそ、その解決の仕方を学び合わせるチャンスです。学級の中で起きた問題は、第三者的な立場ではなく、自分または自分たちの問題として考えさせることが大切です。そのために、普段から一人一人の思いを引き出し、交流させ、さらに学級としての方向性を考えさせることを大切にしたいものです。

●互いを認め合う場を作る●

一人一人が学級全体のことを考えられるようにするためには、日頃から互いを認め合える場の設定が大切です。そのために、スピーチや話合い、「よいところ見付け」、学級通信などを通じて、思いを伝え合えるような取組をします。また、学校行事等の様々な取組の後には努力した姿を認め合わせましょう。

集団の中での「自分」

～メタ認知能力を高める～

ポイント2

生きる力をはぐくむためには、集団の中での自分を意識しながら、自分自身の成長や課題が理解できるよう、メタ認知能力を高めることが必要です。学校行事はメタ認知能力を高める絶好の機会です。メタ認知能力が高まると、自分自身が次にどのようにすればよいかを考える力につながるからです。

※ メタ認知能力

自分自身がどんな力を持っているのか、何が得意で何が苦手なのか、自分を客観的に見る力です。

●目標と一人一人の責任について周知徹底する●

例えば、学校行事に取り組むときに学級や個人の目標を作り、その目標達成のために、一人一人がするべきことや果たすべき責任について具体的に考えさせます。責任の重さを十分に理解させることが大切です。

●振り返りをきちんとする●

学校行事や学級の取組の後には、目標や役割について振り返りをします。ただ「楽しかった」で終結するのではなく、「何をがんばったか」「何が不十分だったか」「次にがんばることは何か」「まだまだやれることは何か」をしっかりと考えさせ、子どもたちで評価し合う機会を設けます。このことを通して、自分自身のメタ認知能力をさらに高めていきます。

教師のかかわり方
～ビジョンを持ってかかわる～

ポイント3

学級担任は子どもたちにとって長い時間を一緒に過ごす一番身近な大人です。正しいモデルを示すことはもちろん、担任として「どういう人に育ってほしいか」「どんな学級経営をしたいのか」など、長期的・短期的ビジョンを明確に持つことが大切です。そして、そのために担任として何ができるのかを具体的に考えていきます。

子どもたちは未来を担う大切な存在です。私たちは、そんな子どもたちを正しい方向へ導くという大きな役割を担っていることを常に忘れず、ともに過ごす日々がかけがえのないものになるよう努力していきたいものです。

●一貫性を持つ●

教師の元気、笑顔は学級のエネルギーの源です。しかし、「ここぞ」というときには毅然とした態度で臨みます。何がいけないかをしっかりと伝え、指導がぶれないようにします。特に人を傷つける言動や暴力、学習する権利の妨害など人権侵害にかかわる問題は見逃してはなりません。

●子どもを認める・ほめる●

直接ほめる、全体の中でほめる、個人ノートなどでほめる、通信でほめる、第三者にほめてもらう、家庭に伝えてほめるなどほめ方の工夫をします。

●長期・短期ビジョンの例●

小学校の例（５年生）
　１年間：高学年としての自覚を持ち、全校児童がよりよい生活を送るために協力し合って活動することができる。
　１学期：学級の友達と楽しく活動するとともに、委員会の役割を理解し、活動できる。
中学校の例（１年生）
　３年間：社会に出たときに人から信頼され必要とされる人間となることを目指し、自分の力で進路を切り拓くことができる。
　１年間：中学校の生活に慣れ、きまりについて理解して中学生として自覚ある行動ができる。

特別支援教育の視点より

核家族化・少子化・子どもたちの多忙化などで、子どもたちは、様々な人々とふれあう機会が少なくなり、社会的な体験が不足しがちになっています。そのような中で、学校教育においても体験活動を重視し、社会性を育てていくことが求められています。人とかかわることが苦手であったり、自分流で人とかかわったりするため、うまく人間関係を築きにくい子どもたちを含め、すべての子どもたちが認め合える好ましい人間関係を目指した学級経営を充実させることは、とても大切なことなのです。

また、子どもたち一人一人の違いを認め合える学級集団の中でこそ、一人一人が自分らしさを表現することができ、過ごしにくさを緩和することができます。心地よい、快の刺激は脳を発達させます。「いがいがことば」（心が痛む言葉）を減らし、「ふわふわことば」（心が温まる言葉）に包まれた、温かい教室でこそ子どもは持てる力を発揮し、さらに力を伸ばしていくことができるのです。

ここで、自分の学級経営を振り返ってみませんか。

落ち着いて過ごせる教室づくり

チェック欄

・　ゴミが落ちていない教室づくりを心掛けている。	
・　使う物の置き場所を決め、整理整頓された教室づくりを心掛けている。	
・　教室を美しく保つことの大切さを子どもに伝えている。	
・　学習しやすい座席配置にしている。	
・　学習に集中できるような掲示物等の工夫をしている。	

見通しが持てる約束づくり

・　朝の会で一日の予定を確認している。	
・　時間を守るように指導している。	
・　宿題等の提出の仕方について指導している。	
・　授業開始時に、机の上に必要なものだけを出すように指導している。	
・　当番や係などの役割分担を全員に分かるように工夫している。	

認め合える関係づくり

・　人間関係が広がるよう、意識してグループを編成している。	
・　学級の中で起きた問題について、学級全体で考える機会を持つようにしている。	
・　子どもが自分自身のよさや課題、成長などを見つめる機会を持つようにしている。	
・　子どもに、どんな人に育ってほしいか、担任としてビジョンを持っている。	
・　子どもを認めたり、ほめたりする機会を工夫している。	

中丹管内の先生方へ

さあ、子どもも先生も笑顔になる
学級経営を目指しましょう。

このブックレットをもとに、さらによりよいものを作成していこうと思います。
皆様の御意見をお待ちしています。

平成２２年３月
中丹プロジェクト２１会議「みんなの笑顔プロジェクト」

※　このブックレットは、中丹教育局のホームページからダウンロードできます。また、このブックレット関連の詳しい内容についても、ホームページで御覧いただけます。御活用ください。

京都府中丹教育局ホームページ　**http://kyoto-be.convi.ne.jp/tyuutan-k/**